

排日期ハワイ日系社会におけるアメリカ化と宗教

——日系人宗教指導者の言説に注目して——

一 問題の所在

近年、アメリカ合衆国（以下、「アメリカ」と略す）の歴史、文化における宗教の重要性が、日本においても関心を集めている。本稿では、本土から遠く離れた島嶼地域であり、先住民の王国の転覆後、一九世紀の最末期にアメリカに併合されたハワイを取り上げて、当地において排日とアメリカ化（Americanization）⁽¹⁾の思潮が高まっていた一九一〇年代から二〇年代の状況を考察することにより、アメリカにおける宗教と同化をめぐる問題の一端を検討したい。

当時のハワイでは、寡頭制をひいた「白人」⁽²⁾支配者層のあいだで、キリスト教の優位性が強調され、仏教を中心と

高橋典史

する日系宗教は批判された。本稿では、まず第二章において、中心となる議論を進めていくための前提となる社会・文化的背景として、ハワイの「白人」たちの議論において、宗教と日系人のアメリカ化（同化）の可否とが結びつけられ、宗教が彼らによる日系人の包摂と排除の手段として動員されていた点を、先行研究の成果を中心に概観する。

そして、本論となる第三章では、排日とアメリカ化の思潮における宗教の問題化に対する日系人側の対応を、当時、最も対照的な立場にあった、仏教、キリスト教それぞれの宗教指導者の言説から明らかにする。そのうえで、二人に共有されていた社会認識と志向性を析出する。当時の「白人」の議論においては、キリスト教と仏教が対照的な存在として論じられていたのだが、この二つの宗教勢力は、日

系社会の宗教のなかでも最も影響力が大きく、時にはコミュニティを二分するほどに対立することもあった集団であった。⁽³⁾そして、分析対象となる日系人宗教指導者としては、仏教徒の今村恵猛(ハワイ本派本願寺教団、以下、「本派本願寺」と略す)と、キリスト教徒の奥村多喜衛(プロテスタント・組合派)の二人を取り上げる。両者は宗教の領域だけでなく、日系社会全体にも大きな影響力を持っていたコミュニティの指導者であり、オピニオン・リーダーとみなせうる存在であった。⁽⁴⁾

以上の考察から、二〇世紀前半のハワイで高まった「白人」たちのアメリカ化論のなかで、宗教が日系人に対する抑圧に動員されていた状況に対して、日系人宗教指導者たちは、みずからの信仰と「民族」的アイデンティティを⁽⁵⁾接合させて対応することにより、日系人たちのハワイ・アメリカ社会への適応を促そうと試みた点を明らかにすることが、本稿の目的である。

二 ハワイの宗教的背景

1 ハワイのキリスト教化

本論に入る前に、ハワイの宗教史について概観しておく

たい。そもそも、世界各地からの移民が移住してくるまでハワイ諸島に先住していたのは、ポリネシア系のネイティヴ・ハワイアンであった。西暦七〇〇年頃にポリネシアから移住してきた人びとは、ハワイ諸島各地に酋長制を中心とする社会を形成し、精霊や神々への信仰などの独自の宗教形態を持っていた。しかし、一七七八年にジェームス・クックがハワイに渡来してからは、多くの商人が欧米から訪れるようになる。そして、貿易商と協力したカメハメハ一世が、一八一〇年にハワイ諸島を完全に統一して王国を成立させる。⁽⁶⁾

欧米からハワイへ渡ったのは白壇貿易商や捕鯨業者が多かったが、一八一〇年代の終わりからは、アメリカ本土、特にニュージーランド地方のプロテスタント宣教師も数多く渡布した。彼らは、積極的な布教活動を行って、ネイティヴ・ハワイアンたちの改宗につとめ、土着の習俗や宗教を排除していった。そして、以前の社会秩序が崩壊していたハワイにおいてキリスト教は急速に広まり、一八二五年には、キリスト教がハワイ王国の国教となる。また、宣教師を通じてアメリカのハワイ王国に対する影響力も増していった。さらに、一八三五年に教会へ寄進された土地で、

サトウキビ・プランテーションの経営が開始されると、宣教師たちの一部はプランテーションを経営する資本家に転身し、ハワイの支配的資本家階級を形成していった。そのなかで特に有力だった者たちは、「五大財閥 (BIG5)」と呼ばれるようになった。⁽⁷⁾

このように、一九世紀のハワイ諸島においては、アメリカからの宣教師を中心にキリスト教化が達成された。⁽⁸⁾その後、宣教師の子孫の「白人」たちは、ハワイの政治経済を支配していき、寡頭体制を築いていった。⁽⁹⁾そのため、ハワイは、政治、経済、文化の面で、アメリカの強い影響下に置かれた。そして、一八九四年のハワイ王朝の転覆（共和国成立）および一八九八年のハワイのアメリカへの併合においても、宣教師の子孫たちが重要な役割を果たしたのである。⁽¹⁰⁾

2 日系宗教の問題化

次に、二〇世紀初めのハワイの「白人」たちの議論において、いかにキリスト教が重視され、日系宗教が批判されていったのかを、先行研究の成果を参照して示したい。

カリフォルニア州では、一九世紀末から早くも排日の声

があがっていたが、ハワイの地もこのようなアメリカ本土の状況と無縁ではなかった。⁽¹¹⁾さらに、日清・日露戦争以降、国外へと膨張政策をとっていく日本に対する危機感も、排日論を刺激した。そして、日系人口が増加していたハワイにおいては、二つの大戦の戦間期に、軍や諜報機関が日系人の動向に警戒を強め、ハワイの支配者層はアメリカ化運動 (Americanization Movement) を展開していったのである。アメリカ化運動の主要な目的は、日本的な風潮の排除とアメリカ的な価値観の増進であった。そのなかで、日系二世のキリスト教徒化が求められ、日系仏教は批判されていった。⁽¹²⁾

実際には、ハワイの日系社会の内部においては、仏教のほかにも神道や新宗教も活動を展開していたのだが、仏教団の勢力は大きく、なかでも本派本願寺が突出していた。そして、仏教教団は、日系社会において大きな政治的影響力を持っていたため、日系宗教と日本的な文化の中心的存在として、「白人」たちからの批判の対象となっていたのである。⁽¹⁴⁾

そもそも、二〇世紀初めにおいては、日系仏教教団が、日系人労働者とプランテーション経営者とのあいだを仲介

する役割を果たすなど、教団と経営者の関係は深刻ではなかった。⁽¹⁵⁾しかしながら、仏教教団の組織力が日系人労働者たちの連帯の基盤になっていくにつれて、教団と「白人」支配者層は対立するようになっていった。G・ドウスによれば、一九二〇年の第二次オアフ島ストライキにおいて、数名の仏教僧侶がストライキを支援したことが、プランテーション経営者たちが仏教批判へと転じる転機となった⁽¹⁶⁾という。さらに、ハワイにおいて、ストライキと並んで大きな問題となったのが日本語学校であった。一九一〇年代以降、日本語学校は、日系人の子女のアメリカ化を妨げて、日本および天皇への忠誠を教育していると批判されるようになり、一九一九年には外国語学校取締法案が準州議会へ提出されるに至る。そこでは、日本語学校経営の最大勢力であった仏教教団が、中心的な批判の対象となっていた。⁽¹⁷⁾

それゆえ、ハワイの主要な英字新聞紙上では、プランテーションのストライキを扇動したとして、日系仏教の僧侶(「異教の僧侶たち(pagan priests)」)たちが批判された。キリスト教の聖職者たちは、「偶像崇拜」である仏教を批判するだけでなく、アメリカへの忠誠心の薄い「外国人」である仏教の僧侶たちが、日系二世たちを誘惑して、

「ジャパニズム」を鼓吹していると非難した。そして、その日系仏教批判の流れのなかに、それ以前から日系社会の内部で、仏教勢力と競合状態にあった日系人キリスト教勢力も合流していったのである。⁽¹⁸⁾

サウス・ダコタ出身でハワイ大学において教鞭をとり、のちにハワイの教育委員会の委員長を務めることになるV・マッコイは、一九一九年に「非キリスト教の信仰」によるハワイのプロテスタンティズムの衰退を悲嘆し、仏教徒の学校を「ミカド崇拜」の聖堂として糾弾した。そして、日系人の九五%が仏教徒であるかぎり、アメリカ化は停滞していくだろうと警告している。さらに、マッコイは、アメリカの民主主義は、キリスト教の理念や実践にもとづくものであるが、仏教は「反民主主義」、「反アメリカ的」であると主張した。また、組合派牧師のH・P・ジャッドも、ハワイの最も深刻な問題は、人種でも政治でもなく宗教であると論じ、ハワイ諸島の三分の一が仏教や神道の崇拜者であり、その二世たちも仏教によって教育されているため、ハワイは「再異教化」していると指摘している。そして、日本語学校と「異教徒の家々(pagan homes)」で教えられている仏教の理念は、アメリカの習

慣と原理に反していると非難している。⁽¹⁹⁾

仏教を中心とする日系宗教への批判は、排日論者だけに限られてはいなかった。「親日家」の「白人」の代表者であった宣教師S・L・ギューリックは、一九一五年に*Hawai's American-Japanese Problem*と題した冊子を発表している。その冊子じたいは、アメリカ人と日系人の相互理解を促すことを意図したものであったが、仏教については次のように書いている。

キリスト教が迷信的な仏教諸宗派に取って代わるまで、彼ら〔引用者注、日系人たち〕は必然的に〔引用者注、仏教に〕固執するだろう。というのも、「人間は矯正できないほど宗教的である」からだ。しかし、彼らが固執するかぎり、仏教が繁栄するコミュニティの倫理的、政治的生活は、不可避に仏教の理念と教えに一致するだろう。……しかし、ハワイにおいて、迷信的な仏教への長期間の執着は起こりえそうもない。日本から移民としてやってきた現在の世代の日本人たちとともに、それは疑いようもなく絶えるだろう。⁽²⁰⁾

このように、「白人」の「親日家」の代表者であっても、仏教の存在は否定的に評価され、キリスト教徒の日系人の擁護という論調が色濃い。

そして、日系社会において少数派であったキリスト教徒たちが、圧倒的な信者数を持つ仏教勢力と対峙することを可能にしたのは、日系人キリスト教徒たちと「白人」たちの協調関係であった。たとえば、一九一七年から二三年までハワイに滞在していた芳賀武による、当時の日系キリスト教会（奥村多喜衛のマキキ教会）の様子についての次のような回顧は、日系人キリスト教徒と「白人」の関係の一端を示しているだろう（この「アサトン社長」とは、ハワイの五大財閥の一つであった「キャッスル・アンド・クック商会」の社長である）。

このアサトン社長は奥村牧師とは特別に親しい間柄であるらしく、時々、牧師の招請によって教会の講壇から講演するのである。講演の内容は、「ハワイは、ニュージーランドの伝統による組合派の教会を持って、宗教教育と社会道徳を守っている所であるから、日本人の諸君もそれに習って欲しい」というのである。

……〔引用者注、「白人」の〕青年牧師がやってきて、……彼はいつも声を張り上げて、「諸君の忘れてはならないことは、アメリカはキリスト教の伝統によって出来上がった国であるということである」と力説するのである。⁽²²⁾

以上のように、二〇世紀前半のハワイにおけるアメリカ化の思潮の高まりのなかで、キリスト教、とりわけプロテスタントの信仰は、アメリカという国家と強く結びつけられていった。その一方で、「異教」に対する嫌悪感と、その背後にあると考えられていた日本という国家への警戒感から、日系宗教は批判の対象となっていた。こうして、当時のハワイ社会においては、宗教をめぐる問題が、日系人のアメリカ化(同化)の問題と結びつけられて、「白人」による日系人の包摂と排除の手段となっていたのである。⁽²³⁾

三 日系人宗教指導者のアメリカ化への対応

1 今村恵猛

ここでは、二〇世紀前半のハワイにおいて、批判の対象となっていた仏教徒側の反応を、当時のハワイの日系人仏

教界および日系社会の重要な指導者であった今村恵猛⁽²⁴⁾の言説を取り上げることで考察する。アメリカ化と結びつけられたキリスト教の重要性が叫ばれていく状況に対して、日系人仏教徒はいかなる対応をとったのだろうか。そして、批判の焦点でもあった日本と彼らの関係を、いかに自己規定していったのだろうか。

仏教徒である今村も、独自のアメリカ化論を展開していた。⁽²⁵⁾彼のアメリカ化をめぐる言説において、注目すべきは「雑種」という概念である。一九一九年に発表された「米国及び米国人」という論考のなかで、今村は、アメリカという国家の特徴を「合衆国」、その国民性については「多言語を話す国民」(Polyglot Nation)と論じている。そして、「米国文明」の特徴を、「雑種文明」(Hybrid Civilization)という言葉で表現している。⁽²⁶⁾

一九二一年に発表した「米国の精神を論ず」という小論においては、「米国精神」の根幹として「良心の独立」と「宗教の自由」をあげている。そして、アメリカの思想の中軸を「多元主義」、「無常主義」、「実証主義」と指摘して、「清浄教」(ピューリタニズム)のみを「国粹」とすること、を、「偏狭なアメリカニズム」と批判している。さらに、

「現時国家として国民として隆昌の時代を為して居るものゝ宗教は、悉く皆他国人種から輸入したものである」として、外国から持ち込まれた宗教への差別や排除が、「人種問題以上の悪差別」で「不合理排擠」なものであると非難している。⁽²⁷⁾ 宗教者である今村が、「アメリカニズム」の根幹として「宗教の自由」を強調したことは当然であるが、ここにも今村の主張における「雑種」の強調を読み取ることができるだろう。

また、今村によれば、当時のハワイの日系二世たちは、日米両国において「悪評」を投げかけられていた。日本社会からは「報恩の精神」と「職務職掌に対する忠節の心」がないとされ、アメリカ社会からは「フェニアプレイ、スクエア、デイルの精神」がないと批判されていたという。そのような批判に対して今村は、本派本願寺の付属学校の機関誌『校友会誌』において反論している（「布哇同胞青年について」、一九二三年）。今村の主張によれば、そもそも移民とは、出自国と移民先の国の双方から、それぞれの基準によって批判されがちな存在であるという。しかし、重要なのは、「将来の世界は必ずハイブリッツの手にある」という点であり、「人種も純粹の人種は滅び、文明も純粹

の文明は滅びる」と述べている。そして、その例証として、純粹な「黒人」や純粹な「布哇の土人」の混血の進行による減少をあげ、その一方で、「文明人」における「二国語主義の教育」という「雑種」の有益性を指摘している。⁽²⁸⁾

このように、今村の言説において頻繁に使用されている「雑種」という概念は、生物学的なレベルだけでなく宗教や言語などの文化的なレベルも含んでいる。そして、「雑種」と「純粹」とを対置させて、アメリカ社会における日系人の存在意義を強調している（ただし、あくまでそれは、アメリカ化を前提とした議論である）。

しかしながら、その後の今村の言説においては、特に日系の子女たちに対して、アメリカ化と同時に、「民族的アイデンティティが強調されていく。とはいえ、それは、国家への政治的な帰属意識を重視するという意味でのナショナリズムとは、性格が異なっている。これは、二〇年代前半までの今村の言説にはあまりみられない論調であり、日本の思想状況からも影響を受けていると考えられるものの、排日移民法の成立以降のアメリカ社会の状況や、日系人のハワイ社会への定着の進行にも対応しているだろう。⁽²⁹⁾ たとえば、一九二八年の昭和天皇即位の大札に際して、

今村は言葉を残している(「御大札と仏教徒」)。このなかでは、日本の歴史において仏教が果たしてきた、大きな役割について説明がされている。今村によれば、仏教は、その伝来以来、皇室によって信仰されて「国民」を「教化」してきただけでなく、武士たちとも強い関係を築いてきた。そして、「印度アーリアの精神主義的文化」である仏教と、「我が祖先特有の精神的審美的感受性」によって、「特殊の日本文化」が生み出されていったという。さらに、日本の仏教徒たちはその国民性もあって、「外来の仏教をして社会国家に順応せしめ、日本の新仏教を樹立し、忠君愛国に力を尽しました」と論じている。そして、最後に今村は、「布哇の天地今や日本文化の中心たる仏教によりて外人を教化すべき機縁既に熟して」と述べている⁽³⁰⁾。

このような仏教の重要性の強調と、日本の文化への傾倒が並存する言説からは、当時の日系社会において、故国日本への関心が強いものであったことがうかがえる。特に、日系人への抑圧の風潮の高まりのなかで、彼らの心情が日本へと回帰していったことも無視できないだろう。しかしながら、日本におけるナショナリズムと、ハワイにおける日本ナショナリズムを、同一視することはできない。それ

はあくまで、ハワイへと越境し、その地に定着してきた日系人たちの、「民族」的アイデンティティとしてのナショナリズムなのである。だからこそ、アメリカ社会の規範にしたがって、今村は「外人」の「教化」の必要性を掲げたのである。

また、今村の言説は、当時の人種や民族の問題も含まれている。一九二九年に『校友会誌』に掲載された「我が卒業生に望む」において、今村は、ハワイの状況を次のように説明している。少々長いが引用したい。

我が布哇は人種の展覧会と称せらるゝ程ありて異人種外国人の集合地であります。併し多くは優秀なる歴史を有せざる民族か、若しくは衰亡に瀕しつゝある人種であつて、其賤劣なる子孫の裡に我が日系市民は生存して悪感化を受けて居るのであります。これが光榮ある日本民族の児孫かと怪しまるゝ様に成り下つて行くのを過去及び現在に目撃するのは実に痛恨に堪えぬ次第であります。此の点に於て二千五百有余年の光輝ある国史の精華は移して以て外国の邦土を飾るべく、東洋文明を集めて大成せる我が民族の精髓は採りて以て

世界の文化を裨補すべき要素である。余はこの精華精神を体得する青年を養成したい念願に基きて斯業に努力して居るのであります。⁽³¹⁾

そして、今村は、同じ文章のなかで日系人の急進的なアメリカ化(米化)主義者たちに対して、東洋の道徳や習慣を軽蔑し、日系人の宗教や民族の美徳までも捨てさせるもの⁽³²⁾として、「悪米化したるバクテリア」と激しく非難している。

このように、今村の言説においては、「日本民族」の優秀性が主張されていくのだが、それは倫理的、精神的美徳などの、きわめて抽象的で観念的なものである。それゆえ、今村の言説における「民族」的アイデンティティの強調とは、それ以外の部分でのアメリカ化を受け入れることを意味しているといえるだろう。ただし、今村の言説で述べられているアメリカ化とは、多様な人種やエスニック集団の文化が融合した、ハワイの「雑種」の環境を受容することではない。「当地には米国東部に居るとき紳士淑女と称すべき模範的なもの多からず」と今村自身が述べているように、「米人の美点特長」とは、あくまでアングロ・サク

ソンのものなのである。⁽³³⁾

さらに、一九三二年に書かれた「布哇日本文庫設立趣意」には、次のような言葉がある。

私は日本文庫の設立によつて、彼等〔引用者注、日系二世たち〕の母国が如何に偉大なる文化を所有するかを知らしめ、以て彼等の発奮を促し、之によつて米国文化に貢献をなし、彼等の活動を一層意義あるものたらしめ度いのであります。⁽³⁴⁾

ここでは日系二世のアメリカ化において、日本の文化が有用であることが主張されている。つまり、日系人の持つ文化が、彼らのアメリカ社会への適応のために動員される資源とみなされているのである。

以上のように、一九二〇年代以降、今村の言説においては、仏教の意義とともに故国日本の民族や文化の優秀性が主張されていった。つまり、今村は、アメリカ化の議論のなかで、仏教と「民族」的アイデンティティを接合させることで、排日論や日系仏教批判に対抗していったのである。そして、今村のアメリカ化論には、アングロ・サクソンの

規範への同調という志向性が明示されている点は看過できない。それは、日系人仏教徒のハワイ・アメリカ社会への適応が、二〇世紀初葉の「白人」を頂点とした力学のなかで、進行せざるをえなかったことを示しているだろう。

2 奥村多喜衛

本節では、二〇世紀前半のハワイの日系社会および日系人キリスト教徒の代表的な指導者であった奥村多喜衛⁽³⁵⁾の言説の分析を行う。当時のハワイにおいて、日系人でありキリスト教徒であるということは、いかなる意味を持っていたのだろうか。

一九一八年、高まりゆく排日論に対して奥村は小論を残している(「布哇に於ける日本人」)。そのなかでは、「在留同胞の将来」にとって最も重要なのは、「児童をして米国市民権を獲得せしむること」であり、多くの日系人が参政権を行使することであると主張されている。また、日系人人口の規模が、ハワイとカリフォルニア州の状況の相違点であることも述べられている。⁽³⁶⁾さらに、奥村は次のように論じている。

元布哇は宣教師に由て開かれ。今日政治上実業上または社会上、実権を握るものは実に宣教師の子孫である。彼等の多くは父祖伝来の基督教的精神を有ち、兄弟主義を以て我同胞に對し。対等の待遇を与へんとして居る。而して各耕地に於ては我同胞が主要の労働者なるを以て資本家は利害の点から市民となつて腰を落付け働くを望んで居る、政治上から云つても民族的偏頗心ある土人の選挙人に対し、順良なる日本系市民の増加を歓迎するものも多いであらう⁽³⁷⁾「引用者注、原文ママ」。

このような奥村の主張は、ハワイの「白人」支配者層に對して、かなり従属的な志向を示しており、それゆえに、日系社会のなかで数々の批判を招いた。しかし、奥村は、将来の日系二世の境遇を考慮したうえで、具体的な対策を論じている点は注目に値するだろう。⁽³⁸⁾

また、奥村は、一九二〇年の「同胞の将来を想ふて」という論考において、「郷に入ては郷に従へ」、「国に入れば先ず法度を問へ」などの言葉で、日系人たちに積極的な同化を求めている。⁽³⁹⁾そして、奥村の議論における「米化の真

意」とは、「精神的同化」とされ、衣食住などの外見のみの同化は厳しく否定されていく。この「精神的同化」とは、アメリカへの忠誠と信仰の問題に集約されている。特に信仰については、アメリカは信教の自由の国ではあるが、「我等智識に於て、俄かに米国人と同等になり得ないにしても、同一神を信じ同一キリストに従へば、互に兄弟であり対等である」とし、「彼我の間に横はる種々の障害を除いて、同情と諒解に達する踏出しとなる」と論じている。⁽⁴⁰⁾ このように、奥村のアメリカ化論において、キリスト教は必須の条件であった。もちろん、奥村がキリスト教の牧師であったことが、その大きな理由の一つであっただろうが、その背景に当時のハワイにおけるアメリカ化の思潮の高揚があったことは確かだろう。

そして、奥村は、キリスト教の重要性を主張する一方で、日本的な生活習慣を固守している日系人たちと、それを促している寺社を厳しく非難した。一九二一年に書かれた「死活問題」において奥村は、彼らの精神を「偏狭なる愛国心」と呼んでいる。そして、天皇崇拜の習慣に固執している日系人の文章と、仏教（曹洞宗および浄土宗）の僧侶たちによる「キリスト教批判」の文章をあげて、それらに

対する批判を展開している。しかし、その一方で、当時の皇太子の「欧州御漫遊」が「欣喜」として言及され、「同胞」たちも、「世界的」な思想に「覚醒」することを促している。そして、この覚醒が、「真の意味に於ける大和民族の発展」であり、「邦家に対する大忠である」と述べている。⁽⁴¹⁾ この論においては、日系宗教が「偏狭な愛国心」として批判の対象となり、日系人の「大和民族」や故国日本への愛着は肯定的に論じられている点は重要である。奥村は、日系宗教とは切り離された「民族」的アイデンティティを、日系人のアメリカ化についての議論へ導入しているのである。このような、日系人のハワイ・アメリカ社会への適応をめぐる奥村の議論からは、アメリカ化の促進と「民族」的アイデンティティの強調の併存という、仏教徒の今村との共有点を読み取ることができるだろう。

さらに、一九二七年から奥村は、「日系市民」に焦点を絞った日系市民会議⁽⁴²⁾をホノルルで開催する。一九四一年まで毎年開催されていくこの会議は、日系社会を担っていく若い世代の「日系市民」と内外の有力者たちとを交流させることで、「米人」と日系人たちの仲介役となる指導者的な日系市民を育成することを目的としたものであった。⁽⁴³⁾ こ

の会議に関して奥村は、ハワイにおいて「日系市民」が増えたことにより、「忠義心に厚い」、「義理堅い」、「礼儀正しい」などの「美風ができた」と、「米人」から認められることで、彼らから「祖国」(日本)への尊敬を得て、「真正の親善協調を実現」して「日系市民の責任を果す」自信を持って欲しいと述べている。⁽⁴⁴⁾ また、次のようにも論じている。

只に市民としては米人と同等であるとの自覚をもつただけでなく。之にふさわしい資格を養う覚悟がなければならぬ。我には二千五百年の間に養ひ来た精華がある。その祖先伝来の美点を受けて市民の分を尽せば、決して土人系市民や葡人系市民、其外各国系市民に一步も遅れを取らない⁽⁴⁵⁾〔引用者注、原文ママ〕。

このように、奥村は、「祖先伝来」の日系人の美点は、アメリカ社会への適応に際して有利に作用するだけでなく、「土人系」(ネイティヴ・ハワイアン系)や「葡人系」(ポルトガル系)などの、競合する他の集団にも引けをとらないことを強調している。

また、一九三一年に開かれた日系市民会議についての言葉において奥村は、ハワイ生まれの「同胞」が、「其生活様式に於て、其宗教に於て凡ての点に於て米化」することの必要性を論じている。しかし、その一方で、アメリカの短所と長所を取捨選択して、「我民族が三千年受けつて来た優秀なる特性を米化させて持参し」、「百パーセントアメリカ市民として大に米国家に尽すべきである」と主張している。そして、「米国市民権を獲得」しながらも、『日本のため』といふ誤った愛国心の感化をうけ教育をうけることによって、「米国民」に疑惑を持たれるようなことがあってはならないと警告する。そのような「二股主義」は、「日系市民の将来発展を阻害するだけでなく」、「我祖国の体面を傷つくることの大きなもの」であり、「我武士道の精神に悖るもの祖先の血を辱むるもの」であると批判している。そのうえで奥村は、日系市民が忠良なアメリカ市民となることで、「米国民」がハワイの「同胞」を受け入れられるようになって、その結果、「其父祖の国を尊敬する様になる」だけでなく、「布哇生れの同胞の成行を監視して居る第三者の国々に良き教訓を与へることゝなる」と述べている。そして、それが、「真に祖国に対する忠義」とな

り、「父祖の名を挙ぐるものとなる」と論じている。⁽⁴⁶⁾

このような奥村の議論における日系人のアイデンティティについての象徴的な表現が、「武士道」⁽⁴⁷⁾である。奥村は、日本人のポジティブな自己イメージとしての「武士道」という観念を強調することによって、日系人がアメリカという国家に対して、「二股主義」ではない忠誠を尽すことの意義を論じている。つまり、日系人の「民族」的アイデンティティである「武士道」が、アメリカへの強固な忠誠心の必要性を叫ぶ奥村の主張の正当性を担保しているのである。さらに、奥村は、ハワイ社会の枠をこえて、アメリカと日本の国家間の対立の解決方法としても「武士道」を用いている。そこには、二つの国家の力学に大きな影響を受けつつも、在米の日系人のアイデンティティを構築しようとした奥村の思考を読み取ることができる。⁽⁴⁸⁾もちろん、このようなアメリカ化およびキリスト教と「武士道」の接合には、奥村が土佐の土族出身であったことが影響しているだろう。とはいえ、日系社会において圧倒的なマイノリティであったキリスト教徒の指導者の奥村にとって、日系人一般に対してみずからの主張を訴えかけるためには、「武士道」などの、彼らの「民族」的アイデンティティ

ティを喚起させるような表現が有効であったとも考えられる。

奥村のような敬虔なキリスト教徒であり、急進的なアメリカ化主義者であった人物の言説においても、「民族」的アイデンティティが強調されている点に、当時の日系人のアメリカ化における「壁」を読み取ることができる。それは、たとえキリスト教徒であったとしても乗りこえられない、「白人」と日系人のあいだに形成されていた「壁」である。そして、奥村が、ネイティヴ・ハワイアン系やポルトガル系の住民を、日系人と競合する集団として論じている点にも、当時の「白人」を頂点とするハワイのヒエラルキー構造に対して、奥村と今村が共通する認識を持っていたことを指摘できるだろう。

四 結論

本稿で取り上げた排日期のハワイにおける代表的な日系人宗教指導者であった、仏教徒の今村恵猛とキリスト教徒の奥村多喜衛によるアメリカ化論の展開とは、当時の「白人」と日系人による協働的なハワイのアメリカ化の流れの一部であったといえる。

第二章で示したように、ハワイの「白人」たちのアメリカ化論の論調には、それによってハワイをアメリカへと十全に参入させようとする志向性が存在していた。そして、その裏面として、日本の言語文化は批判されていた。ここでは、キリスト教(特にプロテスタンティズム)が、アメリカのナショナリズムと結びつけられ、日系宗教は日本のナショナリズムを象徴する「異教」として批判されていた。つまり、宗教が、「白人」による日系人の包摂と排除の手段として動員されていたのである。

そして、第三章では、今村と奥村のアメリカ化をめぐる言説の分析を試みた。仏教徒の今村だけでなく、キリスト教徒の奥村も、日系人のハワイ社会への適応を促すために、それぞれの立場からアメリカ化を論じていった。さらに、両者はともに、排日論に対して、「民族」的アイデンティティを強調することにより、ハワイ・アメリカ社会における日系人の存在の正当性を主張していった。⁽⁴⁹⁾つまり、対立していた二つの宗教の指導者たちは、宗教のみでは解決できない問題(排日論)に対して、「民族」的アイデンティティによって対応したのである。

ただし、そこで主張された日系人のアイデンティティや

文化というものは、故国日本からそのまま移入されたものでは決してない。それらは、日本の文化的な資源を用いて、ハワイという地において新たに編成もしくは、創造されたものである。そして、今村と奥村の議論のなかで、新たに創出されていた日系人のアイデンティティは、彼らが信仰していた宗教(ここでは仏教とキリスト教)と接合されることにより、日系人たちがハワイで存続していくための資源として提示されていたのである。

しかし、それと同時に、今村や奥村の議論には、当時の「白人」(つまり一般アメリカ人)と日系人とのあいだの権力関係が内包されている。「白人」たちによって強いられ、アメリカ化に対応するために、みずからの信仰と「民族」的アイデンティティを接合させていく彼らの主張には、逆説的に「白人」と自分たちとの差異を強化させる要素もはらんでいたことは否定できないだろう。このようなハワイの日系人の状況に大きな変化が生じるのは、第二次世界大戦後のことである。

【付記】本稿は、平成一五年度一橋大学大学院社会学研究科
提出の修士論文である拙稿「排日期のハワイ日系コミュニティ

ティにおける〈信仰〉と〈同化〉——宗教指導者の言説に注目して」の一部である。また、平成一六—七年度文部科学省科学研究費補助金・特別研究員奨励費による研究成果の一部である。なお、引用に際しては旧字体を新字体に改めた。

(1) 通例では、「アメリカ化」を志向する諸運動について、アメリカ社会側ものを「アメリカ化運動」、日系人側のものを「米化運動」と区別して表記してきた。ただし、本稿では、便宜上、両者を包含する語として「アメリカ化」を使用する。二〇世紀前半の日系人のアメリカ化(米化)については、以下の研究があげられる。松本悠子「内在する「他者」と「国民化」——二〇世紀前半のロスアンジェルスにおける日本人移民の「米化」」『中央大学文学部紀要』史学科第四五号、二〇〇〇年。南川文里「エスニック・タウンにおける人種編成——一九一〇年代末ロスアンジェルス日系移民による矯風運動を中心に」『アメリカ史研究』第二六号、二〇〇一年。廣部泉「アメリカニゼーションと「米化運動」」油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』東京大学出版会、二〇〇三年。矢部景子「二〇世紀初頭在米日本人移民社会のナショナリズム——河上清の言説を中心に」『文化史学』第

六〇号、二〇〇四年。

(2) 一九世紀以来、ハワイの上層階層を占めて、政治と経済の両面で寡頭体制を敷いていた、おもにアメリカからの移民の子孫であるアングロ・サクソン系の人びとについて、本稿では「白人」と表記する。

(3) 以下を参照。ハワイ日本人移民史刊行委員会『ハワイ日本人移民史』布哇日本人連合協会、一九六四年(以下、『移民史』と略す)、二二九、二三五頁。ただし、中嶋弓子によれば、一九三〇年までにキリスト教に改宗した者は日系社会のわずか三%であり、他方、日系社会の大半は仏教徒で、その三分の二が本派本願寺の信者であったという(約一〇万人)。以下を参照。中嶋弓子『ハワイ・さまざまえる楽園——民族と国家の衝突』東京書籍、一九九三年、一七八頁。

(4) たとえば、一九六〇年に当時の大手の日系新聞の一つであった『ハワイ・タイムズ』紙上において、「日米修好百年並に官約移住七十五年祭」を記念して行われた「過去七十五年間を通じて最も傑出したと思われる草分日本人」のアンケート結果の上位四名のなかにも、奥村と今村の名前はあがっている(『ハワイ・タイムズ』一九六〇年九月九日)。

(5) 本稿では、二〇世紀初めのハワイの日系人たちが、

「大和民族」や「日本文化」といった自分たちの文化的な資源を、ハワイとアメリカ社会への適応のために動員していた点に特に注目するために、「民族」的アイデンティティ」という語を用いたい。

(9) R.M. Tabrah, *Hawaii: A History*, New York: W.W. Norton & Company, Inc., 1984, pp.11-27.

(7) 以下を参照。中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究』刀水書房、一九八九年、二三九―四一頁。山中速人『ハワイ』岩波書店、一九九三年、一一八―二三頁。

(8) ハワイのキリスト教化については、以下を参照。G. Daws, *Shoal of Time: A History of The Hawaiian Islands*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1968, pp. 65-81, 87-105. また、以下の論文も詳しく。小樽山ルイ「海外伝道と世界のアメリカ化」森孝一編『アメリカと宗教〈現代アメリカ五〉』財団法人国際問題研究所、一九九八年。

(9) ただし、アングロ・サクソン系の「白人」人口は少なく、その他の住民の多くは必ずしもプロテスタントではなかった。それゆえ、ここでは信者数ではなく、強力な権力を握ったプロテスタント集団が、ハワイの支配体制を確立したことを意味する。

(10) Daws, pp.285-92.

(11) 一八七一年にハワイ王国と日本のあいだで、日本・ハワイ修好通商条約が結ばれた。一八八五年からは、プランテーションの労働力として、日本からの移民が本格的に開始されて、多くの日本人移民がハワイへ移住した。しかし、一九〇八年に日米紳士協約が結ばれると、「呼び寄せ」など以外の日本からアメリカへの渡航は禁止されたため、移民たちのハワイへの定住化が進んだ。さらに、一九二四年の排日移民法の成立によって、アジアからの移民はほぼ完全に禁止され、日本からの移民は不可能になった。以下を参照。『移民史』。

(12) G.Y. Okihira, *Cane Fires: The Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945*, Philadelphia: Temple University Press, 1991, pp.129-30. ただし、当時のハワイは日系人が多く、「白人」が少数であったため、日系人に対する排斥は本土ほど激しくはなかった。しかし、それは排日論が存在しなかったことを意味してはいない。ハワイにおける排日論は、移民の初期においては、労働者の生活状態が批判の対象となり、時代が下るにつれて、国籍や日本との関係などの国家への忠誠に関する批判が中心となっていったのである。以下を参照。『移民史』、二八〇―二九四頁。

(13) 当時のハワイ最大手の日系新聞社であった、日布時事

- 社による年鑑『日布時事布哇年鑑（一九二九年度）』日布時事社、一九二九年）によれば、当時の日系社会の宗教状況は以下の通りである（括弧内の数字は教会もしくは寺院数）。日系人が多く所属するキリスト教会……総数三四ヶ所〔組合派教会（二〇）美以教会（メソジスト）（九）聖公会（アングリカン）（一）救世軍（四）〕。おもな日系仏教寺院……総数八五ヶ所〔本派本願寺（三六）浄土宗（一六）真言宗（二三）曹洞宗（九）東本願寺（八）日蓮宗（一）布哇真宗教会（一）天台宗不動明尊（一）カラワ大日堂（一）モロア大師堂（一）〕。神道……総数一四社。
- (14) 以下を参照。Okimiro, I. Hunter, *Buddhism in Hawaii: Its Impact on a Yankee Community*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1971. 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』現代史料出版、二〇〇一年。
- (15) Y. Kimura, *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1992, p.155.
- (16) Daws, p.308.
- (17) 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』ミネルヴァ書房、一九九七年。
- (18) Okimiro, p.130-4.
- (19) Hunter, pp.108, 129-30.
- (20) S・L・キューリックは、宣教師の家系に生まれ、日本の大学でも教鞭をとるなど、親日家として著名であった。アメリカの排日的世論に批判的で、排日移民法に反対する運動を行い、渋沢栄一らと協力して日米関係委員会の委員としても活動した。以下を参照。守屋、前掲書、一四三—四頁。
- (21) S.L. Gulick, *Hawaii's American-Japanese Problem*, Honolulu: Honolulu Star Bulletin, 1915, p.24.
- (22) 芳賀武『ハワイ移民の証言』三一書房、一九八一年、一五二—三頁。
- (23) 二〇世紀前半の「白人」によるハワイの支配体制とは、各人種・エスニック集団を巧妙に社会構造にはめこむことで、集団間の緊張や競合をコントロールしつつ、当地の政治経済を支配するものであった。そして、当時のハワイで最大の人口を占めていた日系人たちは、自営の商業や農業を發展させて、閉鎖的で大規模なコミュニティを形成しつつ、ハワイの社会構造のなかに不可欠な存在として埋め込まれていた。以下を参照。JY. Okamura, "Race Relation in Hawai'i During World War II: The Non-Internment of Japanese American," JY. Okamura ed., *The Japanese American Historical Experience in Hawai'i*, Iowa: Kendall/Hunt Publishing Company, 2001.
- (24) 今村恵猛は、一八六七年に福井県の浄土真宗西本願寺

派の寺院に生まれる。一八七六年に得度して、真宗の私塾でキリスト教についての知識を学んだのち、西本願寺の普通教校(一八八八年に文学寮へ改定)に入学する。一八九〇年の卒業の翌年、慶應義塾に入学する。一八九三年の卒業後は、徳島県や福井県の尋常中学校で教鞭をとる。その後、再び僧侶の道へと戻り、一八九九年に開教使としてハワイへ渡る。そして、一九三二年にハワイの地で死去するまで、ハワイにおける本派本願寺と日系人たちのために尽力した。以下を参照。守屋、前掲書、一九一三九、一〇一頁。常光浩然『明治の仏教者(下)』春秋社、一九六九年、二二—三三頁。

(25) 今村の宗教思想の「アメリカ化」については、守屋友江が詳細に論じている。以下を参照。守屋、前掲書。

(26) 今村恵猛『超勝院遺文集』布哇ホノルル本願寺、一九三七年、一一九頁。ちなみに、本稿で取り上げる今村の著作は、『米国の精神を論ず』(金尾文淵堂、一九二一年)と遺稿集である『超勝院遺文集』(布哇ホノルル本願寺、一九三七年)に収められている。

(27) 今村、一九二一年、一五、一八一—二一頁。

(28) 今村、一九三七年、一八一—一六頁。

(29) 今村の言説の変化には、もちろん日本におけるナショナリズムの高揚も影響しているだろう。島田法子は、今村

の言説の変化を、一九三二年の満州事変の勃発にともなう、ハワイの日系社会における日本ナショナリズムの高まりと関連づけている(島田法子「ハワイにおける日系人仏教にみる文化変容とアイデンティティ」『立教アメリカン・スタディーズ』第二五号、二〇〇三年、四六頁)。

(30) 今村、一九三七年、二二六—三二一頁。

(31) 前掲書、二三八頁。

(32) 前掲書、二四〇—一頁。

(33) 前掲書、二四二頁。

(34) 前掲書、二六九—七〇頁。

(35) 奥村多喜衛は、一八六五年に土佐藩の藩主付きの学者の長男として生まれる。一八七九年に高知中学校高等科に入学するが、家庭の事情で一八八三年に退学。この時期、遠戚でもあった片岡健吉の影響もあって自由民権運動に深い影響を受ける。一八八五年の秋には、片岡らとともに三大事件建白運動に参加するために上京し、保安条例により放逐される。一八八八年に片岡の勧めもあり、妻とともに受洗する。一八九〇年に同志社神学校入学、一八九四年の卒業後、ホノルル日本人キリスト教会(ヌアヌ教会)の宣教師としてハワイへ渡る。一九〇四年にマッキキ教会を創設したのち、一八五一年にハワイで死去するまで、日系人キリスト教徒と日系社会の指導者として大きな役割を果たし

た。以下を参照。中川美佐「土佐からハワイへ」『奥村多喜衛とハワイ日系移民展』実行委員会、二〇〇〇年。

- (36) 奥村多喜衛『太平洋の楽園(三版)』三英堂書店、一九三三年、二二二—二三四頁。

- (37) 前掲書、二二二—二四頁。

- (38) 一九二二年から三〇年にかけて奥村は、ハワイにおいて排日予防啓発運動(一九二五年以降、日米問題解決運動に改称)を展開していった。この運動は、アメリカ西海岸の排日運動の高揚に対応したもので、排日論の材料となっていた日系人たちの生活全般を改変することを目的とし、特にアメリカ化の促進と市民権の獲得を重視した。この運動は、ハワイアン・ボードやハワイの有力者たちだけでなく、洪沢栄一ら日米の有識者たちによる日米関係委員会の支援も受けて展開された。以下を参照。杉井六郎「排日予防啓発運動」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版、一九九一年、七一、一三七—一八頁。

- (39) 奥村、一九三三年、二八二—二五頁。

- (40) 前掲書、二八六—九〇頁。

- (41) 前掲書、三〇四、三〇七—一二頁。

- (42) ハワイにおいてこの会議を賛助したおもな人びとは、F・アサートン、G・キャッスル、R・クック、J・

ウォーターハウス、桑島主計総領事、原田助、毛利伊賀、相賀安太郎である。以下を参照。杉井、前掲書、一三〇頁。

- (43) 奥村多喜衛『布哇に於ける日米問題解決運動(四版)』私家版、一九三三年、一〇九—一一頁。

- (44) 前掲書、一一〇頁。

- (45) 前掲書、一一〇頁。

- (46) 前掲書、一四一頁。

- (47) 奥村のアメリカ化論におけるキリスト教と「武士道」の意義については、以下の重要な先行研究がある。吉田亮「キリスト教化とハワイ日系人のアメリカ化」『宗教研究』第六七巻第一号、一九九三年。そもそも、「武士道」の語は、二〇世紀初めのアメリカ本土の日系人キリスト教宣教師たちの言説においても、しばしば用いられている。そのため、この語は、当時の在米の日系人たちのあいだで用いられた、彼らの「民族的アイデンティティを表す語であったと考えられる。以下を参照。坂口満宏「排日問題と太平洋沿岸日本人キリスト教団」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版、一九九一年、二四九—五二、二六九—七三頁。ただし、坂口が論じているアメリカ本土の日系人宣教師たちと奥村とでは、「武士道」の語の含意や使用されていた時期に違いがある。

(48) 一九二〇年代の奥村の排日予防啓発運動は、排日運動を解消することによって、協調路線が日本政府の基本方針であった日米関係を改善することも意図されていた。以下を参照。島田法子「奥村多喜衛と渋沢栄一——日米関係からみたハワイにおける排日予防啓発運動」『日本女子大学紀要 文学部』第四三号、一九九三年。

(49) ただし、今村においては「仏教東漸」の思想の影響もある点は、留意が必要である。近代日本の仏教界における「仏教東漸」の思想と、今村の思想や活動の関係性については、守屋の前掲書を参照。

二〇〇五年九月十五日受稿
二〇〇五年十一月一日をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)